

森田久もりたひさし―合併直後の太宰府町長―

現在の太宰府の市域は、昭和30年3月の太宰府町と水城村との合併によつて成立したものです。合併以降の太宰府町ないし市の首長は当該地域内の出身者が選出されていますが、合併直後の町長森田久だけは異色の経歴を有しています。

森田は明治27（1894）年朝倉郡夜須村篠隈の旧家に生まれます。早稲田大学卒業後、朝日新聞社に入社、同社時代は経済に関する著作を多く残しています。今日確認できるものとして『予算の見方』、『税の見方』、『地方予算と地方税の見方』、『外国為替の実際知識』、『\$売買の解剖』があり、地方財政と国際金融への造詣が深かったことを窺わせます。同社を退社後は、時事通信の編集局長、九州日報社長、満洲同盟通信社理事長を歴任します。

戦後は太宰府で「友愛塾」を開き青年教育に従事するなど当該地域と若干の縁も見られますが、彼の経歴からは太宰府出身とは呼び難いものもあります。そのような人物が合併直後という大事な時期になぜ太宰府

太宰府人物志

資料室だより③

町長に選出されたのでしょうか。往事を知る人のお話によれば、合併直後だけに旧太宰府町と旧水城村のうち的一方から町長が選出されることで両地域間に軋轢が生じることが懸念されたため、有志たちが外部の人物を招聘したとのことです。特に直前に二日市町なども含めた7カ町村の合併が不成立に終わっただけに、両町村の合併を円滑に進めるためにも最初の町長の選出に意を注ぐ必要があつたと言えるでしょう。その結果、森田は無投票で当選しました。

森田町政時代には、行財政の統一、国民健康保険や国民年金などの新たな行政事務の運営、小中学校の増改築、観光開発などの問題が山積していました。新聞社時代の経験が政策に直接的に反映されたのかは俄には判然としませんが、例えば総評と対決したケースに見られますように、町政運営に強い自負を持って臨んでいたことは言えそうです。

森田は2期8年にわたり太宰府町政にあたり昭和38年に町長を退きます。それ以降は財団などの理事を勤め、昭和46年に亡くなりました。

市史資料室 内山一幸